

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 2 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370218

研究課題名(和文)『无上法院殿御日記』に関する総合的研究

研究課題名(英文)A general research of the Diary written by Princess Tsuneko, Shina-no-miya

研究代表者

川崎 佐知子(KAWASAKI, Sachiko)

立命館大学・文学部・准教授

研究者番号：00536120

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、後水尾院品宮常子内親王自筆の日記『无上法院殿御日記』三十六冊(公益財団法人陽明文庫蔵)を主たる研究対象とした。はじめに、原本の書誌情報と内容確認、および資料判読をおこなった。あわせて、後水尾院品宮常子内親王の伝記の事項を整理した。つぎに、後水尾院品宮常子内親王の周辺でおこなわれた公家による文芸的活動を確証した。さらに、後水尾院品宮常子内親王の属する近衛家全体の文事を考察した。研究期間全体を通じて、未翻刻資料である『无上法院殿御日記』を研究資料として広範囲で活用できる研究環境を整えることができた。

研究成果の概要(英文)：The subject of this research is "the diary written by princess Tsuneko, Shina-no-miya", belonging to Yomei-bunko foundation. The first result is making a bibliography and collating data, a life of Princess Tsuneko, Shina-no-miya. The second is putting data about the court arts during the Edo period in order. The third is illustrating how the arts has grown in the Konoe clan.

研究分野：日本文学

キーワード：近世文学 女流日記 宮廷文化 内親王 近衛家 品宮

1. 研究開始当初の背景

(1)本研究に関する国内外の研究動向

『无上法院殿御日記』は、後水尾院品宮常子内親王の日記である。公益財団法人陽明文庫(京都府京都市右京区)に、計三十六冊の自筆本が管理されている。記主は、後水尾院の皇女で、五撰家筆頭の近衛家第二十代基熙室である。近世が、武家を中心とする男性優位の封建社会の時代であったことを思うと、この日記は「皇室の血筋を受けた女性」によって書かれたところに特色があるといえる。以下に掲げる先行研究も、この特色に注目している。

松井利彦「女房ことばの変遷 「するする」の場合」(『国語国文』36-4 1967年4月、『女中ことば集の研究 女性語の制度化と展開』武蔵野書院 2014年に再録)

花田雄吉「陽明文庫所蔵近衛家三夫人の日記」(『二松学舎大学東洋学研究所集刊』第2集 1972年3月)

安田富貴子「「をとこもすなる日記をむなもしてみんとてする」日記 『无上法院殿御日記』と『基熙公記』」(『国文橋』17号 1990年3月)

安田富貴子「翻 『无上法院殿御日記』」(『国文橋』18号 1991年3月)

瀬川淑子『皇女品宮の日常生活 『无上法院殿御日記』を読む』(岩波書店 2001年)

久保貴子『後水尾天皇 千年の坂も踏みわけて』(ミネルヴァ書房 2008年)

後藤久太郎編著・松井みき子著『近世初期上層公家の遊興空間』(中央公論社 2010年)

上記の位相語研究から、の日本史研究やの庭園史研究まで、『无上法院殿御日記』は、夙に幅広い研究分野で取り上げられてきた。しかし、翻刻は、でごく一部が紹介されるにとどまっている。全文の翻刻は、文学・歴史・芸能・文化・語学など広範囲の研究者が期待するところである。

(2)本研究の着想に至った経緯

研究代表者は、かつて近衛基熙の文芸活動を考察し、からまでの四つの成果をあげた。

後西院による禁裏本複本作成と近衛基熙との関係

・川崎佐知子「延宝五年の「狭衣」校合」(『中古文学』77号 2006年6月、『『狭衣物語』享受史論究』思文閣出版 2010年に再録)

近衛基熙の『源氏物語』書写と注釈作業

・川崎佐知子「陽明文庫蔵近衛信尹他寄合書『源氏物語』の資料的価値」(『日本古典文学研究の新展開』笠間書院 2011年)

・川崎佐知子「近世前期源氏学の展開 『一簣抄』の注釈史的位置」(『中古文学』85号 2010年6月)

・川崎佐知子「近衛閑白家の源氏注 近衛基熙『一簣抄』の特質」(『源氏物語の展望』8輯 三弥井書店 2010年)

・川崎佐知子「『一簣抄』の周縁」(『国語

国文』75-11 2006年11月)

・川崎佐知子「資料紹介・陽明文庫蔵「近衛基熙消息」」(『詞林』45号 2009年4月)

近衛基熙と近世前期の近衛家蔵書

・川崎佐知子「近衛基熙の書物交流」(『和歌文学研究』96号 2008年6月)

・川崎佐知子「陽明文庫蔵「近衛基熙消息」の翻刻と解題」(『国文学論叢』19号 2008年3月)

近衛基熙の文芸活動と周辺人物

・川崎佐知子「近世前期の奈良連歌師 春日社司中東時真をめぐって」(『文学』12-4 2011年4月)

以上の成果を基礎に、後水尾院品宮常子内親王の日記『无上法院殿御日記』の研究を思い立ったのである。

2. 研究の目的

本研究は、後水尾院品宮常子内親王の日記『无上法院殿御日記』全三十六冊(陽明文庫蔵)を主たる研究対象とする。研究の目的はつぎの三点である。

(1)未翻刻資料の『无上法院殿御日記』の全文翻刻作業を進め、研究資料として容易に活用できるような環境を整える。

(2)後水尾院品宮常子内親王の特殊な立場(内親王で撰閣家当主の正室)に留意し、近世期の高貴な女性の視点が捉えた文芸活動の実態を明らかにする。

(3)後水尾院品宮常子内親王の周辺の人物(天皇家・公家から地下の学者・芸能者まで)の文化的活動を照射し、近世前期の近衛閑白家を中心とする文芸圏の存在を証明する。

3. 研究の方法

上記「研究の目的」に掲げた三点の目的を遂行するため、各年度に重点研究テーマを設定した。

(1)平成 26 年度

重点研究テーマを「『无上法院殿御日記』と品宮常子内親王に関する資料報告」とし、考察対象である陽明文庫蔵『无上法院殿御日記』について、以下の作業をおこなう。

実見調査と情報収集

陽明文庫(京都府京都市右京区)において、『无上法院殿御日記』三十六冊の実見調査を実施する。調査内容は、原本の書誌情報と内容確認および資料判読である。また、関連資料を収集するため、諸機関での調査を実施する。実施予定機関は、東京大学史料編纂所(東京都文京区)、宮内庁書陵部(東京都千代田区)などである。調査実施予定資料は、『一乗院門跡入道真敬親王日記』、『滋野井公澄日記』などである。このほか、最新の研究動向を探るため、中古文学会(大会年2回、関西部会年3回、国内)・和歌文学会(大会年1回、東京例会年3回、関西例会年3回、国内)などへ参加する。

資料内容の分析・検討

実見調査と情報収集の結果をふまえ、調査実施後、すみやかに、『无上法院殿御日記』の内容の分析と検討にはいる。まず、できるだけはやく、正確に、日記の全文を翻刻する。あわせて、記主の後水尾院品宮常子内親王の伝記的事項を整理する。

研究成果の公表

の作業により得られた結果は、年度末を目途に、学術論文として公表する。

補足（予期せぬ事態が生じた場合の対応）

本研究で考察する資料については、原本の実見調査を実施する。考察対象資料はかなり大部であるため、一回の調査では十分な結果が得られない可能性が高い。その場合は、原本の所蔵者・関係諸機関の定める方法により、複数回の調査をおこなう。また、必要に応じ、原本の撮影・紙焼写真・マイクロ複写などによる複写物の作成を、原本の所蔵者・関係諸機関に対し申請する。

(2)平成 27 年度

重点研究テーマを「後水尾院品宮常子内親王周辺の文化活動に関する資料報告と文学的価値」とし、以下の作業をおこなう。

実見調査と情報収集

陽明文庫(京都府京都市右京区)において、『无上法院殿御日記』三十六冊の実見調査を実施し、原本の書誌情報と資料内容の確認・資料判読の精度を高める。また、関連資料収集のため、諸機関での調査もおこなう。実施機関と実施予定資料は、平成 26 年度と同様だが、研究の進展により、調査対象を広げる場合もある。このほか、最新の研究動向を探るため、平成 26 年度と同様の学会へ参加する。

資料内容の分析・検討

平成 26 年度の成果に、実見調査と情報収集で確認した情報を加え、後水尾院品宮常子内親王が生きた時代の天皇や公家の文化的活動や歌壇の動向に焦点をあて、考察を進める。関連資料とも対照し、日記の背景にある文化的な環境も明らかにする。

研究成果の公表

の作業により得られた成果は、年度末を目途に、学術論文として公表する。

補足（予期せぬ事態が生じた場合の対応）

資料が多種にわたるため、関係諸機関での実見調査が複数回必要になる場合もある。その場合は、諸機関の定める方法にそって調査回数を増やすとともに、写真撮影や紙焼写真などの複写物の利用を検討する。

(3)平成 28 年度

重点研究テーマを「近世前期近衛家の文事に関する報告」とし、以下の作業をおこなう。

実見調査と情報収集

前年度までの研究を近衛家全体の文事に捉え直すため、後水尾院品宮常子内親王の交遊を裏付ける資料の実見調査を、陽明文庫(京都府京都市右京区)で実施する。また、

諸機関での資料収集も、前年度までと同様に実施する。このほか、最新の研究動向を探るため、および成果を公表するため、平成 26 年度と同様の学会へ参加する予定である。

資料内容の分析・検討

実見調査と情報収集であらたに得られた情報は、調査実施後、すみやかに整理し、前年度までの研究成果に照らし合わせながら、詳細な分析と検討をおこなう。

研究成果の公表

前年度までの研究成果を基礎に、調査内容に補正を加え、最終年度として総合的な研究報告をおこなう。

補足（予期せぬ事態が生じた場合の対応）

資料が多種にわたるため、諸機関での実見調査が複数回必要になる場合もある。その場合は、諸機関の定める方法にそって調査回数を増やすとともに、写真撮影や紙焼写真などの複写物利用も検討する。

4. 研究成果

(1)平成 26 年度の成果

研究の主な成果

重点研究テーマ『无上法院殿御日記』と品宮常子内親王に関する資料報告にそって、陽明文庫所蔵の後水尾院品宮常子内親王自筆『无上法院殿御日記』三十六冊の書誌情報と内容を精査した。また、品宮常子内親王の伝記を、『无上法院殿御日記』、および近衛基熙の日記『基熙公記』などにより、整理した。これらの成果は、川崎佐知子『无上法院殿御日記』研究序説(『論究日本文学』100号 2014年5月)に公表した。

さらに、近衛家と後水尾院・後西院・霊元院など、近世前期の禁裏・洞中・公家社会全体の文化的交流の様相を確認し、本研究の基盤とするため、熊倉功夫・筒井紘一・名和修監修、川崎佐知子編『御茶湯之記 予楽院近衛家熙の茶会記』(思文閣出版 2014年)をまとめた。

これらの研究による成果の一部を、川崎佐知子「連歌師紹巴と『源氏物語』」(平成 27 年度中古文学会秋季大会 2015 年 10 月 24 日 県立広島大学〔広島県広島市南区〕)に活用した。

国内外におけるインパクト

『无上法院殿御日記』に関係する近年の研究は、「1. 研究開始当初の背景」に掲げた瀬川淑子『皇女品宮の日常生活 无上法院殿御日記』を読む』(岩波書店 2001 年)に依る傾向がある。同書は、『无上法院殿御日記』を、東京大学史料編纂所蔵の明治三十五年(1902)謄写本に基づいている。これに対し、本研究は、陽明文庫蔵『无上法院殿御日記』、すなわち記主の後水尾院品宮常子内親王の自筆本に依拠し、書誌の確認などの基礎的調査の段階から見直したのである。

『无上法院殿御日記』全三十六冊は、寛文六年(1666)から元禄十三年(1700)までの三十五年分の記録である。三十五年分三十六

冊の年数と冊数の食い違いは、延宝六年記が、正月以降五月迄と、六月以降十二月迄との二分冊であるためである。これ以外に、二十四年分二十四冊は、二冊であったものが合綴されている。現在の改装された形態は、記主への尊称を含む書名『无上法院殿御日記』とそれを著す表紙も合わせ、後世の近衛家内部で手が加えられた結果である。書かれた当初は簡素な仮綴であり、書名も原表紙にある「日々記」である。

自筆本に基づき、書かれた当初の状態を意識することにより、内容の読解に関しても、従来の研究とは異なる、いくつかの成果が得られた。『无上法院殿御日記』には、十数度にわたる記事の中断が認められる。中断の理由は、二男一女の出産と産後の養生、自身の病気、近親者（実父の後水尾院・実子の大炊御門信・実子近衛家熙の室女一宮憲子内親王）の死去、罹災などである。やむにやまれぬ切迫した状況での断筆は、自筆本に見られる記事の空白などの現存状態になまなましく反映されている。

このほか、『无上法院殿御日記』から、後水尾院品宮常子内親王の経歴、および近縁者や交流のあった人物を整理した。研究の初年度として、従来の研究の是非を再検討し、問題点を洗い出し、以降に不可欠な基本情報を揃え、研究基盤を固めることができた

(2)平成 27 年度の成果

研究の主な成果

重点研究テーマ「後水尾院品宮常子内親王周辺の文化的活動に関する資料報告と文学的価値」にそって、『无上法院殿御日記』の内容を精査するとともに、関連資料を見い出すための調査とその考察をおこなった。

とくに、品宮常子内親王の実子近衛家熙、品宮常子内親王の同腹弟の南都興福寺一乗院宮真敬親王の活動に注目した。その成果の一部を、川崎佐知子「陽明文庫蔵『一乗院宮御茶湯』をめぐる 修練時代の近衛家熙茶会記」(『論究日本文学』102号 2015年5月) および川崎佐知子「(茶書紹介)『御茶湯之記 予楽院近衛家熙の茶会記』」(『茶書研究』4号 2015年7月)で公表した。

国内外におけるインパクト

近世の近衛家を代表する文化人は、第二十一代当主、近衛家熙である。その功績は、近衛家に入りしした啞科医で、近衛家熙に御伽として仕えた山科道安『槐記』に描かれるところに依拠することが多い。ところで、近衛家熙の生母は、後水尾院品宮常子内親王である。『无上法院殿御日記』の記事から、『槐記』からの晩年とは違う、若年・壮年の近衛家熙の動向を読み取るべく試みたのである。

近世前期に宮中・貴族間で盛行した公家茶道に関わって、当時二十歳の近衛家熙が、一乗院宮真敬親王の茶会の模様を、自筆で著した他会記『一乗院宮御茶湯』(陽明文庫蔵)を、所蔵機関の許可を得て、初めて全文を翻

刻し、紹介できた(前掲、川崎佐知子「陽明文庫蔵『一乗院宮御茶湯』をめぐる 修練時代の近衛家熙茶会記」)ことは、大きな成果であった。翻刻に際し、『无上法院殿御日記』・『一乗院門跡入道真敬親王日記』により、内容を補完することができた。また、谷端昭夫『公家茶道の研究』(思文閣出版 2005年)第四章第二節「流儀化と伝授 近衛家熙と鷹司輔信」に説くところの常修院宮等によって完成された公家の茶が、後西院・真敬親王によって一定の形式に整えられる過程において、『一乗院宮御茶湯』は、未だ修練時代の近衛家熙が、後西院・真敬親王に導かれる様子的一端を示す資料であることがわかったのも収穫であった。

研究の二年目として、『无上法院殿御日記』を応用的に利用し、記主の周辺で展開されている文化的活動にまつわる資料紹介とその位置づけを考察する目的を果たすことができた。

(3)平成 28 年度の成果

研究の主な成果

重点研究テーマ「近世前期近衛家の文事に関する報告」にそって、近世前期の近衛家の文事に関係する資料の調査とその考察をおこなった。

品宮常子内親王の父、後水尾院が師事した近衛信尹の活動の一端を検討し、その成果を、川崎佐知子「立命館大学蔵「近衛信尹書状」について」(『論究日本文学』104号 2016年5月)に公表した。

後水尾院品宮常子内親王の実子で、第六代將軍徳川家宣の御台所である天英院近衛熙子の自筆消息「天英院近衛熙子消息」(陽明文庫蔵)から、近衛家と江戸將軍家との関係、天英院近衛熙子の伝記とその文学的役割について検証した。成果の一部を、川崎佐知子「天英院近衛熙子について」(中古文学会関西西部会第44回例会、2016年9月3日 京都学園大学〔京都府京都市右京区〕)に公表した。また、川崎佐知子「大奥の公家女性」(『創造する市民』108号 2017年2月)にまとめた。

国内外におけるインパクト

「天英院近衛熙子消息」は、江戸の近衛熙子が、京の近衛家へ宛てた消息である。陽明文庫に約600余通が伝存する。これらは、第二十二代当主の近衛家久宛てである。発信の正確な年次等はないが、消息の署名、宛て所の官位呼称により、元禄末から享保年間にかけて書かれたものと推定できる。

内容的な特色として、裏方の私信である点をあげることができる。とりわけ、宝永年間に、近衛家久が、祖父の近衛基熙の監督下、『源氏物語』を書写する際に、料紙の調達を請け負う消息には注目できる。近衛基熙の近衛家久に対する教育は、『基熙公記』『无上法院殿御日記』に確認でき、『源氏物語』の書写も、『基熙公記』等に詳述される。ことに、

「天英院近衛熙子消息」からは、江戸にいな
がら、近衛熙子が、近衛家の文事に間接的に
関わっていた事情を、あらたに指摘すること
ができる。

研究の最終年度として、前年度までの成果
を踏まえ、後水尾院品宮常子内親王が属した
近衛家全体の文学的活動を、最も信頼性の高
い陽明文庫所蔵の一次資料・自筆資料等によ
って、総合的に検証することができた。

(4)研究期間全体の成果と今後の展望

研究期間全体を通じて、研究開始当初に計
画した三段階の重点研究テーマを、各年度で
解決しながら、確実に成果を積み重ね、当初
設定した三点の目標を、おおむね達成するこ
とができた。

『无上法院殿御日記』においては、近衛基
熙の日記『基熙公記』との照合が肝要である。
それは、『滋野井公澄日記』等の公家日記や、
後水尾院品宮常子内親王の血縁者の日記『一
乗院門跡入道真敬親王日記』『堯恕法親王日
記』等と同様、同時代の記録として事実を確
認するため、というばかりではない。『基熙
公記』は、近衛家の正式な記録、すなわち「表
の日記」であるのに対し、『无上法院殿御日
記』は、近衛家内儀の記録、「裏の日記」で
ある。共通する事件や行事を描くに当たって
も、両者の見方は、必ずしも一致するという
わけではない。撰閲家の当主とその室が、そ
れぞれに独立した位置を保っていたことの
現れではないだろうか。本研究を通じて、『无
上法院殿御日記』自体を読み込むこと以上に、
これを補完する『基熙公記』の重要性を認識
できた。

今後の展望として、『无上法院殿御日記』
が、できるだけ多くの研究に活用されるよう
な環境を、早急に整えるよう努める所存であ
る。本研究により、研究資料として公開する
下準備を完了することができた。引き続き、
定められた方法を遵守しながら、関係諸機関
と交渉し、慎重に、手続きを進めていきたい
と考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

川崎 佐知子、大奥の公家女性、創造する
市民、査読無(寄稿依頼)、108号、2017・02、
pp20-26

川崎 佐知子、立命館大学蔵「近衛信尹書
状」について、論究日本文学、査読有、104
号、2016・05、pp45-51

[http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/lt/jl/
ronkyu_list/](http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/lt/jl/ronkyu_list/)

川崎 佐知子、(茶書紹介)『御茶湯之記 予
楽院近衛家熙の茶会記』、茶書研究、査読無
(寄稿依頼)、4号、2015・07、pp97-99

川崎 佐知子、陽明文庫蔵『一乗院宮御茶

湯』をめぐって 修練時代の近衛家熙茶会記
、論究日本文学、査読無(寄稿依頼)、102
号、2015・05、pp13-26

[http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/lt/jl/
ronkyu_list/](http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/lt/jl/ronkyu_list/)

川崎 佐知子、『无上法院殿御日記』研究序
説、論究日本文学、査読無(寄稿依頼)、100
号、2014・05、pp37-52

[http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/lt/jl/
ronkyu_list/](http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/lt/jl/ronkyu_list/)

〔学会発表〕(計2件)

川崎 佐知子、天英院近衛熙子について、
中古文学会関西支部第44回例会、2016・09・
03、京都学園大学(京都府京都市右京区)

川崎 佐知子、連歌師紹巴と『源氏物語』、
平成27年度中古文学会秋季大会、2015・10・
24、県立広島大学(広島県広島市南区)

〔図書〕(計1件)

熊倉 功夫・筒井 紘一・名和 修 監修/川
崎 佐知子 編、思文閣出版、『御茶湯之記 予
楽院近衛家熙の茶会記』、2014、610頁

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

川崎 佐知子 (KAWASAKI, Sachiko)

立命館大学・文学部・准教授

研究者番号：00536120

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者 ()

研究者番号：

(4)研究協力者 ()